

エージェント共食システムにおける同期手法の検討

A study of synchronizing method in a co-dining system with an agent

学籍番号：201721706

氏名：顧 佑祺

GU YouQi

食事では栄養摂取といった生理的な意義のみでなく、人との関係を維持し円滑にするといった社会的な意義もある。また、1人で食事することより、誰かと一緒に食事のほうがよりリラックスでより味わうことができることがわかった。しかし、近年では、個々の生活リズムの多様化や家族と離れて生活するなどといった時間的また距離的な制約により、単独で食事することを余儀なくされる状況も多くなっている。

孤食者を支援するため、共食支援という研究がある。そのなか、仮想な相手やビデオメッセージなどの手法を応用して時間的に制限があっても一緒に共食できるように孤食者を支援する研究もある。それらの研究では、それぞれ違う手法を利用したが、孤食者に誰かと一緒に共食している感覚を体験させることを目的とする。

そのなか、摂食行動に注目すると、井上らは擬人化エージェントを用い、食事行動の行われと行われない手法が視聴者に与える影響を明らかにした。また、塩原らは同じくエージェントを用いて、行われた食事行動頻度が視聴者に与える影響について研究した。そこで、本研究では、食事行動の行われるタイミングに着目し、孤食者の行われた食事行動と同調するという同期手法の効果について検討する。本研究では、先行研究に用いられた擬人化エージェントを利用し、以下の2つ同期手法の支援システムを設置し、同期からもたらす効果を比較した。

- a) 食事行動の開始タイミングが一致したエージェントが視聴者の食事行動と食事満足度に与える影響を調べた。食事行動が同調されたエージェントの場合、エージェントに向けた視線量がより多く、共食感やエージェントへ印象が向上したことがわかった。実験で得られた結果をふまえ、食事相手が視聴者に同調したことがもたらす効果であるか、または同調のみからもたらす効果であるかの疑問ができた。
- b) そこで、エージェントを食事行動の開始タイミングさせることでなく、視聴者が意図的にエージェントの食事行動のタイミングを合わせるという同期手法について検討した。実験したところ、その同期手法は同期でない手法よりエージェントに向けた視線量がより多く、ゆっくり食事ができる、エージェントへの印象、エージェントの行動への印象が良くなることがわかった。また、食事行動の特徴が共食と類似していたことが示唆された。

研究指導教員：井上 智雄

副研究指導教員：若林 啓